

幽汀に見られる応挙画風について

藤井 菜都美 (学習院大学)

18世紀、京都の絵師「石田幽汀」、その名は応挙の師として名高い。美術史において幽汀は、我が国最大の画派である狩野派と、江戸中期から近現代に至るまで影響を及ぼしている円山派、この二大画派をつなぐ人物として注目されている。しかしながら、その実態は未だ明らかにされていない部分が多く、研究の余地が残されている。幽汀、応挙の関係としては、奥文鳴『仙斎円山先生伝』などに記されたように、応挙が初め幽汀に絵を習ったということと、幽汀画に見られる「写実性」と、応挙の写生画との関連付のみが語られてきた。果たしてこの師弟関係はそのような淡泊なものであったのだろうか。本発表では、幽汀作品を観察することを主とし、その中に見られる応挙画風を見出すことで、幽汀・応挙の師弟関係を再考する機会としたい。

幽汀作品は、年記の無いものが殆どであり、法橋、法眼によって大きく二期に分けられるのみである。この内、法眼期のいくつかの作品に応挙画風が見られるが、本発表では、以下の二作品を取り上げる。

まず一つ目は「溪流に鹿図屏風」(大英博物館蔵)である。本作は二曲一隻の金地墨画屏風で、細かな毛描きのなされた鹿が目をひく。溪流の描写は狩野派の筆法にならった形式的な描写であり、全体の構図としては、当時流行の沈南蘋を踏襲している。主要モチーフである鹿は、応挙をはじめとする円山派のそれと多くの類似点を見出すことができる一方で、その中には狩野派との類似部分もある。ここに、様々な流派を柔軟に学び取っていた幽汀の姿が見えてくる。

二つ目の作品は「須磨図屏風」(聖護院蔵)紙本着色、六曲一双の作品である。探幽様式を良く学んだ雄大な画面と、金雲によって光あふれる空気が表されている。本作の人物について見てみると、その中に、応挙「四季遊戯図巻」(徳川美術館蔵)中の人物と酷似する人物が見つかる。この作品においても、人物モチーフすべてが応挙画と共通するわけではなく、様々な画風が混在していることが指摘できる。

以上、見てきたように、幽汀画には応挙画風がはっきりと表れており、この傾向は応挙の画風確立後に見られることから、幽汀が応挙の画風を取り入れたものと見ることができる。これは幽汀、応挙の親近性を表していると考えられるのではないか。幽汀は、応挙画をそのまま写すのではなく、他流派の画風と共に良いものの一つとして取り込み、新たな自分の画風を作り出している。これは、幽汀が応挙を一人の絵師として認めていた証であり、言い換えれば、二人は師弟関係というよりも同志のような関係だったのではないか。加えて、幽汀晩年期には、幽汀が仲介したと思しき応挙作「神馬図絵馬」(明石・住吉神社蔵)や、「陶淵明・梅鷺図衝立」(所在不明)の合作が存在し、二者の親密な関係性を物語っている。この関係性はその後の両家・両派にも続いており、幽汀の子、友汀と円山派絵師たちとの合作を指摘することが出来る。